

P2-10-23 子宮頸部腺癌の診断における細胞診と狙い組織診の限界

防衛医大

藤田裕彰, 渡辺昭夫, 笹 秀典, 宮本守員, 加藤雅史, 後藤友子, 高野政志, 古谷健一

【目的】子宮頸部腺癌は、罹患数の増加、上皮内腺癌や前癌病変の細胞診による低い検出率などが指摘されている。今回、子宮頸部腺系病変の診断における細胞診と狙い組織診の有用性と限界について、診断困難であった当科症例から検討を加えた。【方法】2006年4月から2010年8月の4年半に当科にて円錐切除を行った子宮頸部初期病変134症例中、子宮頸部腺癌11例(8.2%)を対象とした。円錐切除例は全て、手技を統一した細胞診及びコルポスコピー、狙い組織診を施行し、円錐切除の適応を決定した。子宮頸部腺系病変の細胞診と組織診を比較検討し、特に診断困難であった症例の各検査結果と円錐切除標本組織診の結果を後方視的に検討した。【成績】子宮頸部腺癌11例中、細胞診と狙い組織診の診断一致は7例(64%)、狙い組織診と円錐切除組織診の一致は4例と低かった。細胞診のみ陽性で円錐切除を行った3例は、上皮内腺癌3例、浸潤癌1例であった。狙い組織診では上皮内腺癌であったが円錐切除で浸潤癌であったのが2例、生検で高度異形成であったが、円錐切除では上皮内腺癌であったのが1例あり、子宮頸部腺癌の潜在性の高さが示唆された。【結論】細胞診でも腺系異常細胞が採取しにくい場合があるが、狙い組織診の方が腺系異常組織の検出がより困難な場合が多いことが不一致の原因と思われた。細胞診の方が腺系上皮の異常の検出に有用であるが、約10%の偽陰性率があり、頸部腺癌では偽陰性が多いと思われた。扁平上皮系の異常を認めた場合でも腺系上皮の異常に留意する必要があると考えられた。

P2-10-24 LEGH (lobular endocervical glandular hyperplasia) は悪性腺腫の前駆病変か？

信州大

高津亜希子, 布施谷千穂, 鈴木昭久, 宮本 強, 堀内晶子, 塩沢丹里

【目的】lobular endocervical glandular hyperplasia (LEGH) は組織学的に子宮頸部悪性腺腫に類似した頸管腺の良性増殖性疾患である。LEGH の自然史は不明であるが、胃型粘液産生、水様帯下等の悪性腺腫に類似した臨床、病理学的特徴をもつこと、また悪性腺腫と共存することが多いことから、LEGH は悪性腺腫の前駆病変である可能性が示唆されている。これを明らかにするため、悪性腺腫、LEGH の clonality を解析し、加えて悪性腺腫の発生への関与が報告されている STK11 遺伝子変異について検討した。【方法】悪性腺腫、LEGH 等の診断で手術を施行し、術後の病理診断で LEGH と診断された症例10例、LEGH と悪性腺腫が共存していた症例5例、悪性腺腫と粘液性腺癌が合併していた症例1例を対象に、倫理委員会の承認下に laser capture microdissection 法にて LEGH, MDA, 正常頸管腺の腺管部分を採取し、DNA を抽出した。HUMARA 法を用いて clonality を、また direct sequence 法にて STK11 遺伝子の変異を検討した。【成績】clonality 解析では LEGH の約80% はモノクローナルであった。また LEGH と悪性腺腫の共存症例の75% は両者の X 染色体不活化パターンが一致していた。うち1例で悪性腺腫にのみ STK11 遺伝子変異を認めた。【結論】LEGH の一部は悪性腺腫の前癌病変である可能性があり、その進展過程には STK11 遺伝子変異が関与している可能性が考えられた。

P2-10-25 子宮頸部粘液性腺癌における胃型粘液の発現とその臨床病理学的意義

山梨大

端 晶彦, 大森真紀子, 奈良政敏, 平田修司

【目的】子宮頸部悪性腺腫が胃幽門腺型粘液（胃型粘液と略す）を産生することが知られているが、最近子宮頸部粘液性腺癌の一部にも胃型粘液が出現することが報告され、さらに胃型粘液陽性が予後不良因子である可能性が報告され注目されている。我々は当科で子宮頸部粘液性腺癌と診断した症例に対して胃型粘液の有無を検討しその臨床病理学的検討を行った。【方法】当科で手術療法を行った浸潤子宮頸部粘液性腺癌症例29症例のパラフィン包埋組織より連続切片を作成し、HE 染色、胃幽門腺型ムチン抗体 HIK1083 免疫染色 (HIK 染色)、MUC 6 免疫染色 (MUC 6 染色)、Alcian blue/periodic acid-Schiff 二重染色 (AB/PAS 染色)、p53 免疫染色を行なった。全例でインフォームド・コンセントを得た。胃型粘液陽性判定は HIK 染色、MUC 6 染色のいずれかが腫瘍細胞の10%以上陽性を示した症例を胃型粘液陽性とした。p53 判定も10%以上陽性例を p53 過剰発現とした。【成績】29例中胃型粘液陽性とされたものは10例(34%)であった。その10例中 p53 過剰発現は6例(60%)に認めた。胃型粘液陰性とされた19例中3例(16%)で p53 過剰発現を認めた。予後は胃型粘液陽性症例で予後不良の傾向を示した。【結論】p53 の過剰発現は胃型粘液陽性腺癌に多い傾向を示した。胃型粘液陽性腺癌は発癌経路及び予後において通常型の子宮頸部粘液性腺癌とは区別すべき新たなカテゴリーの可能性がある。